
真実を知ってください
鎮痛剤乱用
ディリーズ
ペルクス
ビコース
ヒルビリー・ヘロイン
jp.drugfreeworld.org

この小冊子が制作された理由

薬物についてのさまざまな情報が氾濫しています。学校や街中、インターネットやテレビで。その中には正しい情報もありますが、そうでないものもあります。

薬物に関して耳にするほとんどのことが、実は売人からのものなのです。かつての売人たち曰く、「買わせるためならどんなでたらめでも言う。」

薬物についての実態と真実を知ればまともな決断を下すことができます。この小冊子は、そのために制作されたものです。あなたのために。

あなたのご意見、ご感想は貴重です。ですからこの小冊子について感じたことをお知らせください。**jp.DrugFreeWorld.org** にアクセス、または **info@drugfreeworld.org** までＥメールでご連絡ください。

処方鎮痛剤の乱用

約1,000万人のアメリカ人が、医療目的以外で処方鎮痛剤を乱用しています。

多くの若者が、違法なストリート・ドラッグよりも安全だと信じて、ハイになるために処方薬に手を出します。しかし、彼らはしばしば、これらの強力な薬を使用するリスクに気付きません。

鎮痛剤を長期間使用すると、医療目的で処方された人でさえ、依存につながる可能性があります。



米国における処方鎮痛剤の使用の急増は、オキシコンチンのような新しいオピオイド系薬剤の導入と共に、1990年代半ばに始まりました。

これらは、依存性が低いと広く宣伝されましたが、その主張は誤りであることが判明しました。

鎮痛剤とは？



鎮痛剤は、痛みを和らげる薬の大きな分類です。一部はアヘンケシ*から作られ、他は研究所で作られた合成オピオイドです。どちらのタイプも、モルヒネやヘロインのような薬物と同じように、体と脳に作用します。

医師を通じて合法的に処方されるか、違法に入手されるかにかかわらず、オピオイドは神経系の痛みの信号の伝達を遮断する強力な薬物です。オピオイドは、快楽に関連する脳の一部も刺激します。したがって、痛みを隠すことに加えて、オピオイドは偽りの多幸感やハイな感覚を生み出します。

ほとんどの鎮痛剤は非常に依存性が高く、依存が生じるとやめるのが極めて難しいです。

* アヘンケシ：種子のさやを作る花の咲く植物で、茶色の粘着性のある抽出物（アヘンと呼ばれる）を含んでおり、強い鎮痛作用と酩酊作用がある。

最も一般的に処方される処方オピオイドは以下の通りです。

ヒドロコドン：バイコディンやロータブを含む多くの商標名で販売されている処方オピオイド。モルヒネと同程度の強さで、非常に依存性が高いものです。

オキシコドン：オキシコンチンやペルコセットなどの商標名で一般的に販売されている処方オピオイド。乱用されると、ヘロインと似た影響を作り出し、神経系に同じように影響を与え、依存性があります。

モルヒネ：アヘンから作られる処方オピオイドで、痛みの治療に使われます。依存性があり、乱用される可能性が高いものです。

コデイン：軽度から中程度の痛みを和らげるために使われる処方オピオイドで、咳止め薬に使われることもあります。他のオピオイドと同様に、依存性があります。

メタドン：オピオイド依存症の維持療法薬や鎮痛剤として使用される処方オピオイド。他のオピオイドのようにハイにはなりませんが、大量に摂取するとある種の多幸感をもたらすことがあります。非常に依存性が高いです。

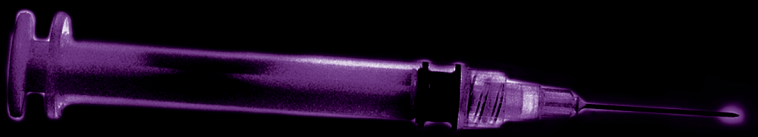
オキシモルフォン：モルヒネと同様の乱用の可能性がある、オパナという商品名で一般的に販売されている処方オピオイド。

フェンタニル：ヘロインの50倍の強さを持つ非常に強力なオピオイド。処方薬として、重度の痛みのために使用されます。違法に製造されたフェンタニルは、しばしば他の薬物と混ぜられ、2011年以降、薬物の過剰摂取による死亡者数を劇的に増加させています。

ヒドロモルフォン：モルヒネより4倍から8倍強力で依存性の高い、ディラウディッドという商品名で一般的に販売されている処方オピオイド。

「20歳の時、私は麻酔薬* 依存になりました。それは手術後の処方薬から始まりました。手術後の何週間かのうちに錠剤を乱用するようになり、薬の効き目がすぐに出るように、また飲み込んだり鼻から吸い込んだりできるように砕いて粉々にしていました。そうすることでヘロインを打つのと同じ感じで注射することもできるのです。薬から離れることは、苦痛以外の何ものでもありませんでした。」

—ジェームズ



* 麻酔薬：中枢神経（脳と脊髄）に作用し、感覚を一時的に麻痺させる薬物。めまい、調整機能の低下、無意識などをもたらす可能性がある

鎮痛剤の通称

一般名	商標名	通称
オキシコドン	オキシコンチン、ペルコセット	Ms. O.C.、オキシ、オキシセット、オゾン、ロキシ、エルクス、キッカーズ、ペルクス、リムズ、タイヤズ
ヒドロコドン	ロータブ、ノルコ、バイコディン	バナナズ、ドロ、フラフ、ハイドロズ、タブズ、バイクス、V-イタミン、ワトソンズ、357s
プロポキシフェン	ダルボセット、ダルボン	フットボール、N、ピンク・フットボール、ピンク、イエロー・フットボール、65s
ヒドロモルフォン	ディラウディッド、エクサルゴ	D、ディリーズ、フットボール、ジュース、スマック
メペリジン	デメロール	デミーズ、ペインキラー
フェンタニル	アクティック、サブリメイズ	アパッチ、チャイナ・ガール、チャイナ・ホワイト、ダンス・フィーバー、フレンド、グッドフェラ、ジャックポット、マーダー8、タンゴ&キャッシュ、TNT

鎮痛剤がなぜ、依存性があるのかを理解する

オピオイド系の鎮痛剤はつかの間の多幸感をもたらし、また非常に依存性があります。

鎮痛剤を長期間使用すると、身体が薬に適応し、使用をやめると禁断症状が現れる身体的依存につながる可能性があります。耐性ができることもあり、同じ効果を得るためにより高い用量が必要になります。

他の薬物と同様に、鎮痛剤は単に服用の対象となっている痛みを隠すだけです。それらは何も治療しません。継続的に痛みを和らげようとすると、摂取量はどんどん増えていき、ついには薬物なし

「私は処方された鎮痛剤の中毒となりました。初めて処方薬の鎮痛剤を取り始めたのは、何年か前に主治医が脊髄手術の後の痛みを和らげるために鎮痛剤を処方した時でした。ここ数年、私は鎮痛剤への依存を断とうとして、実際に2度、医療施設に入りました。そしてつい最近、次の段階に移ることについて主治医と話し合ったところです。」

—ラッシュ



命取りともなる鎮痛剤に抗議する家族。リハビリテーションの専門家は、オキシコンチンなどの強力な鎮痛剤への依存は、あらゆる薬物の中でも最も離脱が難しいと述べています。

では1日も過ごせない状態になってしまいます。

禁断症状には、激しい吐き気、心拍数の増加、高血圧、落ち着きのなさ、イライラ、筋肉や骨の痛み、不眠、下痢、嘔吐、鳥肌を伴う寒気、脚の不随意運動などがあります。

オピオイドの重大な危険性のひとつに、呼吸の抑制があります。大量に摂取すると呼吸のペースが落ちて、さらには停止を引き起こすことがあり、死に至る可能性があります。

オピオイドの流行

長年にわたって乱用、依存症、過剰摂取による死亡が増加し、米国はオピオイドの流行を公衆衛生上の緊急事態であると宣言しました。

それに対処するための取り組みにもかかわらず、オピオイドに関連する過剰摂取による死亡は、1日あたり約200件発生しています。疾病予防管理センターによると、慢性的な痛みのためにオピオイドを処方された患者の最大29パーセントがそれを乱用し、約10パーセントがオピオイド依存症を発症しています。

現在、オピオイドの過剰摂取の危機はフェンタニルによって引き起こされています。売人は、買い手が知らないうちに、違法薬物の効力を高めるためにフェンタニルを加えることがよくあります。1年の間に、オピオイドの過剰摂取による死亡のほぼ70パーセントが、フェンタニルやその他の合成オピオイドに関係していました。

米国での薬物の過剰摂取による死亡者数は、鎮痛剤の乱用が主な原因で、2020年代初頭には年間10万人を超えました。





「自分に『薬物問題』があるとは思っていませんでした― 私は薬局で錠剤を買っていたからです。それが仕事に影響することはありませんでした。朝は少し疲れていると感じましたが、それ以上のことはありませんでした。自分が問題を抱えていると気付いたのは、約40錠もの大量摂取をし、気が付くと病院にいた時のことでした。私は依存を克服するために、12週間、診療所で過ごしました。」―アレックス

「物心ついた時から、私は気分の浮き沈みがありました。私は些細なことで簡単に動揺していました。私は怒りを爆発させたり、理由もなく誰かを嫌ったりしていました。長い間、自分は双極性障害だと思っていました。去年の10月から、望まない感情を抑えるために薬物を使い始めました。でも信じられないかもしれませんが、かえってひどくなりました。今では、自分の依存症と感情の問題に対処しなければなりません。」
—トーマス



心理的および生理的な
鎮痛剤の作用

- 重度の便秘
- 吐き気
- 嘔吐
- 目まい
- 混乱
- 依存性
- 無意識
- 呼吸抑制
- 心臓発作の危険性の増加
- 昏睡
- 死

鎮痛剤：簡略史

鎮痛剤は、もともとはアヘンケシから抽出され、何千年もの間、娯楽と医療の両方に使用されてきました。アヘンの中で最も活性のある物質はモルヒネで、これはギリシャ神話の夢の神モーフィアスにちなんで名付けられました。モルヒネは非常に強力な鎮痛剤ですが、極めて中毒性の高いものです。

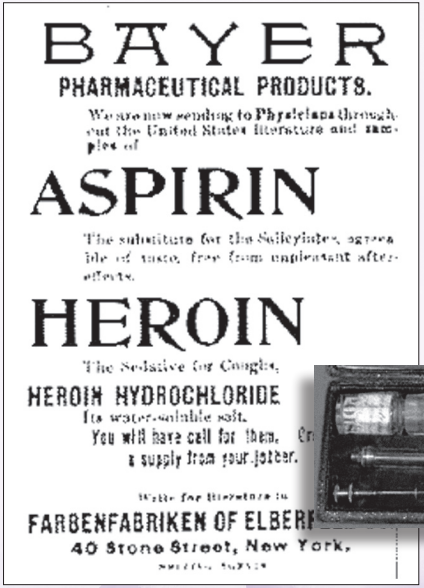
16世紀には、アヘンチンキ（アルコール溶液に溶かしたアヘン）が鎮痛剤として使用されました。

モルヒネは、19世紀初めにアヘンから初めて純粋な形で抽出されました。モルヒネはアメリカ南北戦争中に鎮痛剤として広範囲に使用され、多くの軍人が薬物中毒になりました。



非常に中毒性の高い麻酔薬は、何千年もの間、娯楽と医療の両方に使用されてきました。

モルヒネはアヘンに含まれる最も作用の強い物質であり、非常に強力な鎮痛剤です。アメリカ南北戦争では多くの軍人がこの薬物の中毒者となりました。





コデインの錠剤が入ったビン。あらゆる麻酔薬は一時的に痛みを和らげますが、その中毒性は極めて高いものです。

コデインは、アヘンから抽出、あるいは合成することができる、モルヒネよりも作用が弱い薬です。それは、1832年にフランスで、ピエール＝ジャン・ロビケによって、より副作用が少ない、医療目的で生アヘンの代替品として初めて単離されました。それは主に咳止めとして使用されます。

19世紀初頭を通じて、アヘンの娯楽的な使用が増加し、1830年代には、イギリス人の薬物への依存が史上最高に達しました。1839年、中国がアヘン貿易を抑制しようとしたため、イギリスは中国沿岸に艦隊を送り、「第一次アヘン戦争」が始まりました。

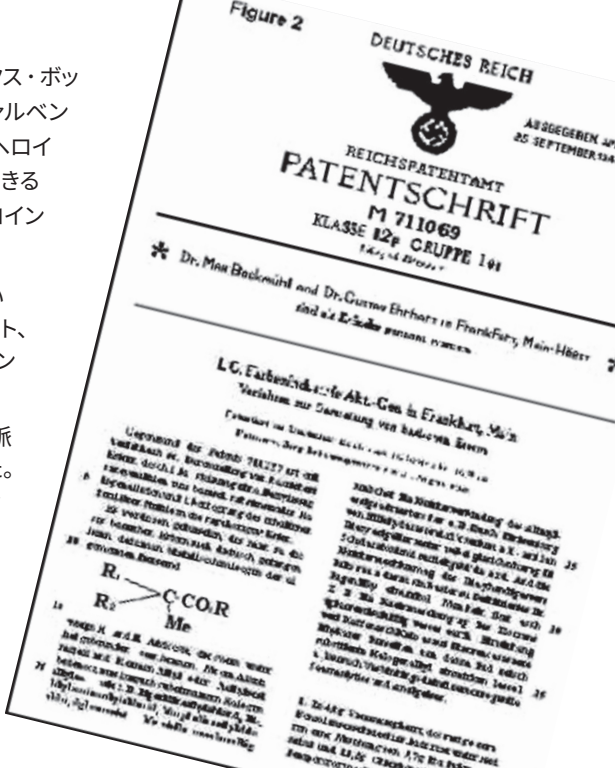
1874年、化学者たちは、モルヒネの中毒性を抑えた形を見つけようとしてヘロインを作り出しました。ヘロインは、モルヒネ中毒の治療薬として最初に宣伝されました。しかし実際にはヘロインの作用はモルヒネの2倍も強力だったため、やがてヘロイン中毒は深刻な問題となりました。

1909年、アメリカ合衆国議会は、医療目的以外でのアヘンの輸入と使用を禁止しました。

メタドンは、1937年にドイツの化学者であるマックス・ボックミュールとグスタフ・エールハルトにより、IGファルベン社で最初に合成されました。彼らはモルヒネや、ヘロインほどの中毒性がなく手術中により簡単に使用できる鎮痛剤を研究していました。しかしメタドンはヘロインよりも依存性が高いと多くの人が考えています。

また、合衆国食品医薬品局の認可を受けた新しい鎮痛剤が売り出されました。1976年にペルコセット、1978年にバイコディン、1995年にはオキシコンチンが発売されました。

フェンタニルは、重度の痛みを治療するための静脈内麻酔薬として1960年代に初めて導入されました。2013年頃から、売人たちは他の違法薬物にフェンタニルを加え始め、それが原因で過剰摂取や死亡が蔓延しました。


Figure 2
DEUTSCHES REICH
REICHSPATENTAMT
PATENTSCHRIFT
M 711069
KLASSE 12p GRUPPE 101
Dr. Max Bockmühl and Dr. Gustav Ehrhart in Frankfurt, Main-Höchst
$R_1 > C \cdot CO_2R$
R_2 Me

ドイツのIGファルベン社のスタンプ。IGファルベン社の化学者ボックミュールとエールハルトによって、ヘロインの合成物質、メタドン（右）の処方が開発されました。

国際的な危機

初めて違法薬物を使用した12歳以上のアメリカ人の間で、処方鎮痛剤はマリファナに次いで2番目に乱用されている物質です。

1年間で、米国では約1,000万人が鎮痛剤の非医療目的での使用を報告しました。

オピオイドの使用者数は、10年でほぼ倍増し、世界で6,200万人に達しました。

2019年には、過去1年にオピオイドを使用した15歳から64歳のヨーロッパ人は360万人に上りました。

過去5年間で、欧州連合における薬物の過剰摂取による死亡者数も増加しています。

イギリスでは、オピオイド系鎮痛剤の処方が34パーセント増加し、イギリスの調査によると、初めてオピオイドを処方された人の10人に1人以上が、1年以内に長期的なオピオイド使用者になっていることが分かりました。

医師やリハビリの専門家は、処方鎮痛剤への依存は克服するのが最も難しいものの1つだと報告しています。

処方鎮痛剤への依存を示す危険信号

最もよく処方されるオピオイド系鎮痛剤（オキシコンチン、バイコディン、メタドン、ダルボセット、ロータブ、ローセット、ペルコセット）は、痛みを軽減すると同時に、使用者の身体に作用して、薬なしでは「普通」の状態を保つことさえできない、依存状態を引き起こす可能性があります。

これらは、あなたの知っている人が鎮痛剤の依存症になりつつあるかもしれないという、注意すべき10の危険信号です。

1. 薬への耐性が増し、同じ効果を得るためにはさらに多くの量が必要になるため、結果として服用量が次第に増加していく。
2. 性格が変化し、日常生活において、薬への欲求以外のことは全て二の次になる。その結果として活力や雰囲気、集中力といった点に変化が起こる。
3. 家族や友人から離れ、自分の世界に閉じこもる。
4. 鎮痛剤で処置していた症状が改善されたにもかかわらず、その後も同じ薬を取り続けている。
5. 処方薬を手に入れるために多くの時間を費やす：薬を手に入れるために長距離を運転したり、複数の医者を訪れたりする。
6. 日常の習慣や身なりの変化：衛生意識の低下、睡眠や食事の習慣の変化、いつも咳き込んでいる、鼻水、充血して生気のない目など。
7. 家事や請求書を省みない。学校や 職場に病気で休むという電話を入れることが非常に多い。
8. 普通の光景や音、感情に対する感受性の増加、幻覚。
9. 起こったことを覚えていない。一時的な記憶喪失を起こす。
10. 警戒心が強くなり、人からの何気ない質問に対して、薬物に依存していることを隠そうとして過剰に反応するようになる。

真実を知ってください：薬物

薬物は基本的に毒です。その作用は、摂取する量によって決まります。

少し摂取すると、活動をより活発にする中枢神経刺激剤として作用します。多めに摂取すると、活動を抑制する鎮静剤として作用します。さらに多量に摂取すると毒となり命を奪います。

これはどの薬物にも当てはまります。こうした作用を引き起こすのに必要な量が違うだけです。

それだけではなく、多くの薬物には人のマインドにも影響を及ぼす弊害があります。薬物を取っている人が自分の周囲で起こっていることを知覚しても、それは歪んだものになってしまう可能性があります。その結果、その人の行動は奇妙だったり、不合理であったりするかもしれません。暴力的になることもあるでしょう。

薬物は、全ての感覚を遮断します。望ましい感覚も望ましくない感覚もです。そのため、短期的には痛みを和らげるために役に立ちますが、同時に人の能力や機敏さを消し去り、思考を不明瞭にします。

医薬品は、身体の働きを良くしようとして、何かを速めたり、遅くしたり、身体の働きを変えることを意図した薬物です。時には必要ですが、薬物であることに変わりはありません。中枢神経刺激剤や鎮静剤といった薬物を取り過ぎれば命を落とすこともあります。したがって、医薬品は規定通りに使用されない場合、違法薬物と同様に危険なものになり得ます。


本当の解決策は、
事実を認識し、最初から
薬物など使用しないことです。

なぜ人は薬物を取るのでしょう？

人が薬物を取る理由は、自分の人生を変えたいと思うからです。

若い世代の人たちが薬物を取る理由には、以下のものがあります。

- 周りとうまくやっていきたい。
- 問題から逃避、またはリラックスするため。
- 退屈を紛らわすため。
- 大人になったような気がするから。
- 反抗するため。
- どんなものか試してみたい。

こういった若者は、薬物が問題を解決してくれると思っているのです。しかし、結局のところ薬物は問題にしかなりません。

自分の問題に直面することが困難なこともあるでしょう。しかし、薬物によって解決しようとしている問題よりも、薬物を使用した方が常に悪い結果を招きます。本当の解決策は、事実を認識し、最初から薬物など使用しないことです。



この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズは、これまでに20以上の言語で出版され、世界中で何百万部も配布されてきました。



新しい薬物が次々と世の中に出回っており、その影響に関する新たな情報が知られるようになっています。本シリーズはそうした新しい情報を盛り込んだ最新版です。

これらの小冊子シリーズは、カリフォルニア州ロサンゼルスを拠点とする非営利の公益法人「薬物のない世界のための財団」によって出版されています。

財団は、その国際防止ネットワークを通して各種教育資料や助言を提供したり、調整を行ったりしています。また、青少年や保護者、教育者やボランティア団体、政府機関ばかりではなく、薬物乱用のない人生を送ることに関心のある人なら誰とでも協力しています。

参照文献：

この小冊子をまとめるのに使われた参照文献：jp.DrugFreeWorld.org/refs

写真：9ページ：OxyABUSEkills.com（抗議）

知っておくべき真実

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズには、マリファナ、アルコール乱用、フェンタニル、危険ドラッグ、エクスタシー、コカイン、クラック・コカイン、覚せい剤、有機溶剤 / 吸入ガス、ヘロイン、LSD、処方薬乱用についての正確な情報がまとめられており、読者が自分の意志で薬物のない人生を送ることができるように役立つ内容になっています。

無料オンライン・コースを行う、または地域の薬物のない世界支部とつながるには、jp.DrugFreeWorld.org にアクセスしてください

薬物のない世界のための財団

jp.DrugFreeWorld.org • info@drugfreeworld.org

1 (888) 668-6378 • 1 (818) 952-5260

この小冊子をダウンロードするには ここをスキャン

© 2025年 Foundation for a Drug-Free World. 不許複製。Truth About Drugsおよび薬物のない世界のための財団のロゴは Foundation for a Drug-Free Worldが所有しており、使用にあたってはその許可が必要です。#S001562 - Japanese